研究ノート

猿のイメージに関する一考察

――中国のことばと文化

鄭　　高　咏

要　旨

中国人はサルというと，二つの漢字を思い浮かべる。一つは「猿」，もう一つは「猴」だ。この二者の違いについては既に豊富な知識の蓄積があるにはあるが，猿と猴をことさらに区別するのは一部の識者による著書の中くらいのもので，たいていの場合，どちらも一括りにして語られ，ほとんど使い分けられていない。もちろん猿と猴では進化の程度に差があり，一般的には尾があるのが猴，ないのが猿とされている[1]ものの，それはあくまでも生物学上の区別に過ぎず，十二支文化の「申」は狭義のサルではなく広義のサルを意味している。中国語においては猿に関する言葉はほぼすべてが否定的な意味合いを帯び，外見，知力，気性，行動など，多岐にわたる猿の特徴に触れ，それをあざけり，さげすむものが大半を占めている。そして実際の会話の中でも，やはり人の容貌や行為を皮肉り，貶める際に使われるのがほとんどだ。この点では民話の「猿」のイメージと若干ずれがあるものの，申年生まれの人に下された評価は短所もあれば長所もあって，決して一面的ではなく，「言葉」や「民話」の猿のそれより断然高い。このイメージアップの原因は，性格判断の文でも触れられている「猿と人間の近さ」にある。人間に似ている猿を全面否定すれば，人間自身を全面否定することになりかねず，人々としてはそれは何としても避けたい。そのため猿と人間を結び付けて考えざるを得ない時だけは，見方がぐっと理性的になるのだ。要するに，こ

の評価の違いは人々の苦肉の策というべきもので，猿に対する人々の矛盾した心理がここにもにじみ出ている。

キーワード：字源と別名，言語の中の「猿」，民話の中の「猿」，「猿」と十二支，イメージの中の「猿」

1　「猴[2)]」の字源と別名

まるで絵のような図1～4は実はれっきとした文字で，どれもそろって「猴」の古字だ。最古の「猴」の字は3000年以上前の甲骨文に見え，それは後世“夔”（náo）とも“猱夔”（náonáo）とも呼ばれる。一説によれば，“猱”は“母猴”や“沐猴”の異名を持つ“獼猴”（アカゲザル），“猱”は“猱猴”（テナガザル）だといい，“猱”の方は殷代に狩猟の対象とされていた。この“夔”と“猱”の古字は形が似ている上，読みも同じなので混同されやすいが，若干の違いがある。まず字形に着目すると，“夔”は手の平が上向き，“猱”は下向きで，さらにほとんどの場合，前者は立ち姿，後者は座った姿で描かれた。これらの字は用法も異なり，“夔”は“高祖夔”なる殷王朝の始祖の名に当てられ，一方の“猱”は狩りの獲物を表し，“獲猱”（猱狩り）という言葉もあった。とはいえ，これらの字はどちらも同時期の「猴」の字と酷似していることから，「猴」の字が作られた当初はこれらのサルを意味していた，つまり「猴」という字は“夔”，または“猱”を原義とし，本来は「象形文字」，今日でいう表意文字だったと考えられる。それを裏付けるのが，『説文解字』の「猴」の字解だ。撰者の許慎はそこで“猴，夔也，従犬侯声。”と述べ，猴は夔と同字であり，犬が意味を，侯が音を表すと解釈している。その後，文字が発展したことで，書き方こそいくらか違えど，読みも意味も同じ“夔”と“猱”は書き言葉としてのみ残り，話し言葉では「猴」がこれらに取って代わった。なお，殷王朝はサルである夔を祖先と見なして祭っていたが，これは原始氏族社会の動物トーテム信仰と切り離して考えられず，ある説では，殷王朝の夔に対するトーテム信仰は，その遠祖が遊牧漁猟生活をしていたころから始まったもので，殷の世にはトーテムである夔を祭る宗廟が建立され，国家の大事に際しては必ず夔を祭り，占いをしてお伺いを立てていた，と考察している。

図１
（甲骨文字）

図２
（金文）

図３
（小篆）

図４
（隷書）

中国人はサルというと，二つの漢字を思い浮かべる。一つは「猿」，もう一つは「猴」だ。この二者の違いについては既に豊富な知識の蓄積があるにはあるが，猿と猴をことさらに区別するのは一部の識者による著書の中くらいのもので，たいていの場合，どちらも一括りにして語られ，ほとんど使い分けられていない。もちろん猿と猴では進化の程度に差があり，一般的には尾があるのが猴，ないのが猿とされている[2]ものの，それはあくまでも生物学上の区別に過ぎず，十二支文化の「申」は狭義のサルではなく広義のサル，すなわち“猿”（類人猿），“猱”，“玀”（アカゲザル），“犹”（オオザルの一種），“狙”（テナガザル），“猩猩”（オランウータン），“禺”（オナガザル），“狨”（キヌザル），“然”（オナガザル），“果然”（オナガザル），“猢猻”（サルの別名），“狒狒”（ヒヒ）など，霊長類のうちサルと目されるものすべてがその範疇に入る。この現象は中国の極めて広い地域で多くの原始部落が各種各様の「サル崇拝」を行っていたことの表れだ。ここで面白いのは，“果然”（guǒrán，果たしての意）なる「サル」がいることで，このサルは別名を“然”，“猓然”といい，『山海経』を始めとするいくつかの古い書物に記録が残されている。実例を挙げれば，鄭玄による『周礼』の注には“然，果然也。”（然とは果然のことである）とあり，『広韵』では“猓然”は“似猿”（サルに似ている）と記し，李時珍も『本草綱目』に，“果然，大者為然，為禺。”（果然の大きなものは然，あるいは禺という），“俗名作猓然。”（俗に猓然という）と述べた。サルに“果然”という名前が付いたいわれには二つの説がある。一つは「鳴き声由来」説で，『太平御覧』に引用されている『山海経』の逸文によると，この“果然獣”（果然なる獣）はアカゲザルに似ていて，“以名自呼”（自らの名を呼ぶ）といい，三国時代の万震が著した『南州異物志』には“交州以南，有果然獣，其鳴自呼，身如猿。”（交州以南には果然という獣がおり，鳴いて己を呼び，サルのような姿をしている），つまり鳴き声が“果然”と聞こえると記されている。もう一つは「果たして来る」説で，宋の陸佃の『埤雅』は“猓然”について，“性好理髯，又愛其類。生相序，死相赴，殺一可以致百。”（よく毛づくろいをし，仲間を大切にする。その結束は固く，仲間と一緒に死のうとするので，1匹殺すと100匹が集まってくる）と解説し，『本草綱目』にも，1匹の“果然”を捕らえて殺そうものなら，案の定，仲間たちが生死，苦難を共にしようと殺到し，決して仲間を見捨

てることはなく，予想にたがわずやって来るため果然と呼ばれる，という旨の記事，“人捕其一，則挙群啼而相赴，雖殺之不去也。謂之果然，以来之可必也。”がある。義のために命を投げ出すこの生き物を，人々は敬意を込めて“仙猴”と呼んだ。先に挙げた『山海経』の逸文もサルの習性を“群行，老者在前，少者在后，得果実，輒与老者，似有義焉。”（群れで行動し，年少者が年長者を立て，餌を手に入れると必ず年長者に渡す。まるで義を心得ているかのようである）とたたえている。中国人が古来，干支としてあがめてきたのは，このような義理も人情もある賢いサルにほかならない。とりわけ“美猴王”と称される『西遊記』の孫悟空は「申年」の理想像で，この神通力を持った茶目っ気たっぷりのサルが自由を追い求めて奮闘するイメージは中国の「申」，そして「申年」の象徴とされ，広く人々に愛されている。

2 『西遊記』の孫悟空のルーツ

明の呉承恩が書いた小説『西遊記』の中で，72変化の術を持つ不思議な猿，孫悟空は天宮で大暴れした後，天竺へ仏典を取りに行く三蔵法師に用心棒として同行し，道中で自慢の神通力を駆使して八面六臂の大活躍をする。孫悟空のキャラクターといえば，猿・神・人が三位一体となった複合イメージに，人々の自由への憧れと自然を征服したいという強い願いが多少加味された像，と断言できるが，そのルーツとなるとそうはいかない。これをめぐっては，昔からさまざまな説が唱えられ，いまだに結論が出ていないからだ。今のところ中国では，以下の三つの説を中心に議論が続けられている。一つ目は，孫悟空は中国の伝統的な猿文化を基礎として作り上げられた「中国文化の精髄」で，そのモデルは古代神話に登場する水中に住む妖怪，無支祁であるとする説。無支祁は巫支祈，巫枝祇などとも呼ばれる淮河の水神で，『太平広記』巻四六七の「李湯」の条に引かれた唐の伝奇『戎幕閑談』に詳しい。それを次にざっとたどってみよう。この妖怪は“善応対言語，辯江淮之浅深，原隰之遠近。形若猿猴，縮鼻高額，青躯白首，金目雪牙，頸伸百尺，力愈九象，搏撃騰踔疾奔，軽利倏忽，聞視不可久”（言葉を巧みに操り，長江や淮河の深さ，平原や湿地の遠さを見分ける。姿形は猿に似ており，小さな鼻と高い額，黒い体と白い頭，金色に輝く目と真っ白な牙を持つ。首は100尺ほども伸びそうに思われ，力は9頭の象に勝り，攻撃，跳躍，疾走はいずれも敏捷で，身軽なことこの上なく，その速さたるや耳にも目にも留まらぬほどである）という特徴を備え，中国古代の帝王，禹王は淮河の治水の際，相当苦戦を強いられながらもそれを下した。そして妖怪の首に太い鎖を巻き，鼻に穴を開けて金の鈴を付けた上で，淮陰の亀山のふもとに運んでそこに封じ込め，見事淮河の水害を鎮めることに成功する。それから時は下って唐の永泰年間（765～766年），楚州の長官を

務めていた李湯が，亀山のふもとの水底に大きな鉄の鎖が沈んでいるという話を耳にし，人と牛を動員して引き揚げさせたところ，にわかに大風と大波が起こり，水の中から1匹の獣が飛び出してきた。獣は猿に似ていて，身の丈が5丈ほどもあり，白い頭，長いたてがみ，真っ白な牙，金色の爪を持ち，猛然と岸に上がるや，かっと目を見開いて周囲の人垣をにらみ付け，その稲妻のような眼光に人々が恐れおののき，くもの子を散らしたように逃げ去ると，獣はゆっくりと水中へ戻っていったという。以上が『戎幕閑談』の記述で，禹王が捕らえ，後に李湯が目撃したそれこそ無支祁だ。魯迅は孫悟空と無支祁のつながりを早くから指摘して，呉承恩の『西遊記』に描かれた孫悟空には無支祁の“神変奮迅之状”（変幻自在で疾風迅雷の様）が投影されていると考察し，多くの学者がこれに賛同している。二つ目は，万能の猿は「輸入品」で，そのモデルとなったのはインドの古い叙事詩『ラーマーヤナ』の猿神，ハヌマン（Hanuman）であるとする説。胡適を旗手とするこの説を支持する学者も少数ながら存在する。残る三つ目は，先の二つの説の間をとり，孫悟空のイメージは中国の要素と外来の要素の掛け合わせで，中国固有の無支祁伝説の影響を受けつつハヌマン神話の影響も受けた「混血猿」であるとする説だ。どれもそれなりに筋が通っていて判断に迷うところだが，こうした議論があること自体，先人たちの中で猿がいかに重要な位置を占めていたかを示しているといえるだろう。

3　言語の中の「猿」

人類は猿に対して一種の自然な親近感を抱いている。猿は頭が良く，しぐさも人間に似ているところがあるため，賢い人のことをしばしば“那个人猴精猴精的。”（あの人は何ともまあ利口だ）と形容するが，もちろんこの言い回しは手放しで褒めているわけではない。またよく動き回る子供について，“那孩子像猴子似的，没有一分鐘老実気儿。”（あの子はまるで猿だね，1分たりともおとなしくしていられない），“這孩子猴里八七的，没个正経様子！”（この子は猿みたいにふざけてばかりで，ちっとも落ち着きがないんだから）などのようにいい，性格に問題があるお天気屋にはよく“你怎麼是猴脾気呀，一会儿高興，一会儿生気的。”（あなたはどうしてそんなに気まぐれなの，喜んだと思ったら急に怒り出したりして，まったく猿じゃあるまいし）という。このほか“猴”にまつわる言葉には，“猴急”（やきもきと気をもむ様），“猴子跳”（高利の貸付金，利息の高さを猿のジャンプにたとえている），“瘦猴”（やせっぽち），“猴快”（猿のようにすばしっこい），“猴頼”（とにかくやんちゃな子供），“猴飲”（猿のように手の平で水をすくって飲む）などがあり，植物名にも，“猴耳環”（キンキジュ），“猴歓喜”（ハリミコバシモチ），“猴桔”（タチバナ），“猴面包樹”（バオバブ），“猴楸樹”（ダンコウバイ），“猴頭”（ヤマブシタケ），“猴棗”（カキの木），“猴

樟”（クスノキ）など，“猴”を冠するものが多々ある。それでは次に，成語や慣用語の「猿」を見ていこう。

①“朝三暮四”（朝三暮四）

宋の国にいた狙公（そこう）という老人は，猿をたくさん飼っていた。老人と猿は以心伝心の仲で，老人は猿たちの気性を十分に知り尽くし，猿たちもまた老人の言葉をよく解したそうだ。やがて老人の猿は増えに増え，その餌代のために家計が逼迫したので，やむなく家族の食べ物を減らして猿たちの餌に回していた。ところがそれでもやり繰りがつかなくなり，ついに老人は断腸の思いで猿たちの餌を減らすことにしたが，さりとて猿たちの機嫌を損ねたくはない。そこで老人はまず猿たちに，ドングリを朝に三つ，夜に四つやろう，と持ち掛けた。すると猿たちが怒り出したので，では朝に四つ，夜に三つではどうか，と言い換えたところ，猿たちは大いに喜んだという。この故事は『列子・黄帝』のほか，『荘子・斉物論』にも簡単な記述が見える。元々“朝三暮四”は，言葉巧みに人をだますという意味だったが，後に転じて，ころころと目まぐるしく変わることをいうようになった。マイナス評価の語で，多く書き言葉に使う。現代の用法：“這个人朝三暮四，不可靠。”（この人は移り気であてにならない）

②“沐猴而冠”（沐猴にして冠す）

『史記・項羽本紀』には，ある人が，項羽は英雄の器ではないと難じ，“人言楚人沐猴而冠耳，果然。”（人は，楚の人〈項羽を指す〉のことを衣冠を身に着けた猿と言うが，まったくその通りだ）と口にしたという記述がある。このあざけりの言葉が“沐猴而冠”の出典だ。“沐猴”はアカゲザル，“冠”は冠を着けることをいい，成語全体でアカゲザルが人並みに冠をかぶっている，すなわち人間に成り済ましたけだものを意味し，才能も人徳もない人でなしが人間のふりをすることをたとえる。書き言葉に使うマイナス評価の語で，風刺的なニュアンスが強く，権勢にこびて分不相応な地位に就いている人についていうことが多い。現代の用法：“借着父親的権勢，児女們都沐猴而冠，飛黄騰達。”（父親の七光りで，子供たちは要職に就き，とんとん拍子に出世している）

③“猿鶴虫沙”（猿と鶴と虫と砂）

『芸文類聚』巻九十には，晋の葛洪の『抱朴子』が引用されている。その中の，周の天子である穆王が南方の荊楚の地に遠征して全軍壊滅し，戦死した士官は猿や鶴になり，兵士は虫や魚，砂，石になった，という文意の“周穆王南征，一軍尽化。君子為猿為鶴，小人為虫為沙。”がこの成語の語源だ。戦場で命を落とした将兵をいう言葉で，現代中国語ではあまり使わない。ちなみに，ここに登場する周の穆王は昭王の子で，姓を姬，名を満といい，50歳にして即位し，その後55年間も王位にあったと伝えられる長寿の王だ。さすが100年を超える人生を生きただけあって，この王のエピソードは多い。ほんの触りを挙げれば，

穆王は各地を巡幸して狩りをするのが趣味で，西に遊んだ折に西王母と出会ってあまりの楽しさに帰るのを忘れ，南を訪れた際には雲夢まで足を伸ばし，出掛けたついでとばかりに楚子に命じて徐を討伐させ，勝利を手土産に帰国したという。なお，穆王が没したのは荊楚の地ではなく，“猿鶴虫沙”を生んだ先の故事はあくまでもフィクションだ。

④“猿猴取月”（猿猴，月を取る）

『僧祇律』巻七にある次のような故事に由来する成語だ。

その昔，インドのバラナシに500匹ものアカゲザルがいた。さて猿たちが林の中で遊んでいた時のこと，井戸をのぞいてみてびっくり仰天。お月様が沈んでる。そこで猿の大将はすわ一大事と仲間に呼び掛けた。

「お月様が死んで井戸に落っこちたぞ。これじゃこの世は真っ暗闇になっちまう。おいらたちでお月様を助けようじゃないか。おいらは木の枝につかまるから，おまえはおいらのしっぽにつかまれ。そうやってみんなでどんどん数珠つなぎになりゃ，お月様を引き揚げられるだろう。」

けれども木の枝は重みに耐えかねてぽきんと折れてしまい，井戸に映った月を救おうとした猿たちは，哀れ，1匹残らず井戸の中へ落ちていったとさ。

この成語は無知や愚かさのたとえ，または無駄骨のたとえだが，現代中国語ではめったに使わない。

⑤“殺鶏嚇猴”（鶏を殺して猿を脅す）

“殺鶏儆猴”，“殺鶏駭猴”ともいう。猿は血を見るとおびえるため，猿使いは鶏を殺して猿に血を見せ，脅しつけて手なずけるそうだ。恐らくはそこから来た“殺鶏嚇猴”は，誰か一人を懲らしめて他の者への警告とすることをたとえる中性の語だが，若干マイナスの意味合いが含まれる。話し言葉，書き言葉として，多く改まった場面で人や物事について使う。例文：“中国政府正在審査那些偸税漏税的私有企業。前不久逮捕了一位十分有名望的女演員。這件事引起了社会的轟動，大家都説這是殺鶏嚇猴。”（中国政府は脱税している私営企業の取り締まり中で，先日は大物女優が逮捕された。この事件は社会に衝撃を与え，これは見せしめだと誰もが口々にうわさしている）

⑥“尖嘴猴腮”（とがった口と猿のような頬）

猿のようにやせこけて醜い顔立ちの形容で，清の呉敬梓が著した『儒林外史』三の“像你這尖嘴猴腮，也該撒泡尿自己照照！”（おまえのその貧相な顔ときたら，しょんべんでもして映してみやがれ）が出典だ。描写性，比喩性がやや強く，人の器量のまずさをいうマイナス評価の語で，話し言葉に使うことが多い。例文：“他長得尖嘴猴腮的，看起来很不舒服。”（彼の顔は不細工で，どうにも見苦しい）

⑦“猴年馬月”（申年午月）

ある説いわく，確かに昔は申年，午年という具合に，干支で年を数えたが，月に干支を当てて午月，申月ということはなかった。そこから，いつのことか分からないことを“猴年馬月”というようになったらしい。物事が延び延びになっていつまでも実現しないことをたとえる中性の語で，主に話し言葉で使う。例文：“都等了這麼久了，要等到猴年馬月啊？”（もうずいぶん長いこと待っているけれど，いつまで待てばいいのやら）

⑧“火中取栗”（火中の栗を拾う）

17世紀のフランスの詩人，ラ・フォンテーヌの作品に，猿の口車に乗せられた猫が炉の中の栗を拾ったが，結局自分は栗にありつけなかったばかりか，足の毛が焼けてしまった，という寓話『猿と猫』がある。“火中取栗”はそこから生まれた言葉で，人に利用されてひどい目に遭いながら，何一つ報われないことをいう。くだけた文章に使うマイナス評価の語で，比喩性が強い。例文：“這个人辦事缺乏頭脳，総把政治舞台看得過于簡単。其結果是為他人火中取栗，自己受損害。”（この人はとにかく浅はかで，政界を甘く見過ぎていた。それがたたって火中の栗を拾わされ，貧乏くじを引くことになった）

⑨“樹倒猢猻散”

木が倒れると猿は四散する。宋の龐元英（ほうげんえい）の『談藪・曹咏妻』に見える故事に由来する成語だ。南宋の曹咏という人は，丞相の秦檜（しんかい）と親しく，その引きで高官になった。ところがやがて秦檜が死に，彼に取り入って我が世の春を謳歌していた人々はことごとく地位を追われ，曹咏もまた新州（現在の広東省新興）へ左遷される。そこで前々から曹咏に恨みを抱いていた厲徳斯（れいとくし）は，秦檜を大樹に，曹咏らその取り巻きたちを大樹に群がる“猢猻”（猿）になぞらえ，猿たちは大樹の木陰で権勢を笠に着て威張り散らしていたが，今や大樹は倒れ，猿どもは離散を余儀なくされた，という内容の文をしたため，『樹倒猢猻散賦』と題して曹咏のもとへ送り付けた。この意味深長にして痛烈かつユーモラスな文章を読んだ曹咏は憤死せんばかりだったとか。ここから生まれた“樹倒猢猻散”は，トップの失脚に伴い，よりどころを失った追従者が散り散りに去っていくことのたとえだ。マイナス寄りの中性の語で，よく話し言葉に使う。現代の用法：“他們家曾轟轟烈烈過一時，可是自従老爺子一去世，便樹倒猢猻散，大家只好各自謀生去了。”（一時，あの一族は相当羽振りが良かったが，長老の死を境に家運が傾き，おのおので生計を立てざるを得なくなり，皆方々へ散っていった）

⑩“猢猻入布袋”

猿を布袋に入れる。『景徳伝灯録』の“僧曰：‘恁麼即学人帰堂去也。’師曰：‘猢猻入布袋。’”（和尚が年長の寂禅師に，「学生たちを勉学に専念させるにはどうしたら良いでしょう」と尋ねたところ，禅師は，「猿たちを布袋に入れるべし」と答えた）が出典だ。この言葉は宋

の文学者，欧陽脩の『帰田録』巻二にも出てくる。当時，詩人として30年来名を馳せていた梅聖俞は，「自由」に暮らすのが何よりと考え，この時代にあっては珍しく，仕官することに執着を抱いていなかった。ところが皮肉なもので，宋の仁宗の代に，欧陽脩の監修の下で『唐書』が改編されることになり，梅聖俞も編者の一人に任ぜられる。朝命とあっては従わないわけにもいかず，彼は妻に，「私も編纂に携わるようにとのご沙汰が下ったが，これは猿を布袋に押し込めるようなものだね」とこぼしたとか。この“猢猻入布袋”（“猢猻入袋”ともいう）は，活発に動き回る猿が布袋に入れられると自由に動けなくなるように，束縛されて窮屈な思いをすることのたとえで，現代中国語ではあまり使わない。

⑪“教猱昇木”

猿に木登りを教える。『詩経・小雅・角弓』の“毋教猱昇木。”（猿に木登りを教えるなかれ）が出典で，朱熹の集注[3]には“猱，獼猴也。”（猱とはアカゲザルのことである）とある。後に“教猱昇木”は，悪人をけしかけて悪事をさせることのたとえになったが，現代中国語で使われることはほとんどない。

⑫“山中無老虎，猴子称大王”

虎のいない山で猿が王を名乗る。優れた人物のいない所でつまらない者が名を揚げ，幅をきかせることをたとえるマイナス評価の語だ。例文：“現在是山中無老虎，猴子称大王。如果有一天真来了能人，就没有他的事了。”（今でこそ鳥なき里のこうもりといった状況だが，いつか真の実力者が現れたら，あいつなんか誰からも相手にされなくなるさ）

⑬“属猴的――坐不住”

申年生まれ――座っていられない。浮ついていて腰が据わっていない人をたとえるマイナス評価の語だ。例文：“你是不是属猴的呀？怎麼一分鐘也坐不住！”（あなた申年なんじゃないの。1分たりともじっとしていられないなんて）

⑭“孫猴子的臉――説変就変”

孫悟空の顔――呪文一つですぐ変わる。『西遊記』の孫悟空の72変化の術にちなんだ言葉で，ころっと変わることをいうマイナス評価の語だ。例文：“這里的天気，好像孫猴子的臉，説変就変。”（ここの天気は孫悟空の顔みたいだ，あっという間に変わる）

⑮“孫猴子大鬧天宮――慌了神”

孫悟空，大いに天宮を騒がす――慌てる。孫悟空が天宮で大暴れしたために，神々は取り乱し，すっかり肝をつぶしたという『西遊記』の中でも有名なエピソードから，顔色を失い，神経を尖らせることをたとえるマイナス寄りの中性の語だ。例文：“這一突如其来的消息，如同孫猴子大鬧天宮，所有的人都慌了神。”（その突然のニュースは，孫悟空の大暴れさながら，みんなを動揺させた）

⑯ “猴吃麻花[4)]——蛮（満）擰”

猿が“麻花”を食べる——無理にねじる（まったく逆）。“麻花”とは練った小麦粉を細長く伸ばし，2，3本をねじり合わせて揚げた菓子で，猿はこれを“蛮擰”（強引にねじる）して食べようとする。その“蛮”(mán) と音が似ている“满”(mǎn) に掛けて，“满擰”（まったく逆）という意味になるこのしゃれ言葉は，物事の見方ややり方が完全に間違っていて，まるであべこべであることをいうマイナス評価の語だ。例文：“我要説的意思不是你所理解的那様，整个一个猴吃麻花——蛮擰”（私が言わんとしている意味を君は取り違えている。さしずめ猿が“麻花”を食うってやつだな，まるっきり正反対だ）

⑰ “猴子爬竿——上躐下跳”

猿がさおをよじ登る——あっちで飛んだり，こっちで跳ねたり（方々駆け回って画策する）。このしゃれ言葉は“上躐下跳”に「跳ね回る」という意味と，「あちこちで策動する」という意味があるのを生かしている。無節操で，自分の利益のためなら手段を選ばず，機に乗じて甘い汁を吸おうとする人を形容するマイナス評価の語だ。例文：“這个人不是靠自己的実力進取，而是把更多的精力放在不択手段地搞人際関係上。如同猴子爬竿一様，上躐下跳的。”（この人は自分の実力でのし上がろうとせず，あの手この手でコネを作ることにより多くの精力を注ぎ，猿のさお登りよろしく，東奔西走している）

⑱ “猴子看戯——乾瞪眼”

猿が芝居を見る——いらいらするだけで手も足も出ない。猿が芝居を見たところで，せりふも歌の文句も分からないから，ただ目を見開いて眺めているしかないことに掛けたしゃれだ。中性の語で，はたでやきもきしているのだが，どうすることもできないことをたとえるほか，腹立たしくて仕方がないのだが，いかんともし難いことをたとえる。例文：“当時，我們赤手空拳，没有任何物力、人力、財力来抵抗，只能是猴子看戯，乾瞪眼，一点辦法也没有。”（あのころ我々は徒手空拳で，太刀打ちできるような物資も，労働力も，財力も皆無で，猿の芝居見物のように手をこまねいているしかなく，まったくお手上げの状態だった）

⑲ “猴儿上旗杆——順杆爬”

猿が旗ざおを登る——さおを伝って登る（人に迎合する）。“順杆爬”は文字通り「さおを登る」ことをいう以外にいくつか語義があり，そのうちの「こびへつらう」という意味に掛けたしゃれ言葉だ。マイナス評価の語で，他人の意思や言葉，要求に合わせた言動をすることをたとえる。例文：“他為了討好上司，従不対上級説一个‘不’字，総是猴儿上旗杆，順杆爬。”（彼は気に入られたいがために，上役に「ノー」と言ったためしがなく，いつもへいこらしていて，まるで旗ざおをよじ登る猿だ）

⑳ “猴子看書――假斯文”

猿が本を読む――えせ文人。上品そうに，もしくは学があるかのように振る舞うことをたとえるマイナス評価の語だ。例文：“這人一向不学無術，十分無知。但他総是装出一副知識分子的様子，這叫猴子看書，假斯文。”（こいつは昔から無学無能で，まったく持って無知だ。なのにいつもインテリぶって，こういうのをお猿の読書というんだ。しょせんただのポーズさ）

このほか猿にまつわる成語には“心猿意馬”があるが，馬の項で述べたためここでは触れない。

「猿」にまつわる慣用語はまだ尽きないが，この辺で打ち止めにしておこう。以上に挙げた成語や慣用語から分かる通り，言葉の中の猿のイメージは，「あまりにも利口過ぎる」，「浮ついている」，「落ち着きがない」，「せっかち」，「感情の起伏が激しい」，「やんちゃ」，「小賢しいまねをする」，「短慮」，「愚か」，「無知」，「醜い」，「人を口車に乗せる」，「抜け目がない」，「インテリを気取る」，「悪賢い」と相当悪く，ほめられるのはせいぜい「賢い」，「元気がいい」，「すばしっこい」，「臨機応変」なところくらいしかない。

猿に関する言葉はほぼすべてが否定的な意味合いを帯び，外見，知力，気性，行動など，多岐にわたる猿の特徴に触れ，それをあざけり，さげすむものが大半を占めている。そして実際の会話の中でも，やはり人の容貌や行為を皮肉り，貶める際に使われるのがほとんどだ。この点，次に紹介する民話の「猿」のイメージと若干ずれがあり，その原因は，言葉自体，特に俚諺自体が持つ現実性，実用性という特質，並びに人間と動物を区別する意識の深い影響と直結している。人間と動物を別のものとする考えは，文明発展の過程の中で徐々に形成されてきた人類の自意識の表れにほかならず，大自然の中で絶対至高の地位に君臨するのは「万物の霊長」たる人間以外になく，人間と動物は絶対的に違うのだ，ということを強調するものだ。その区別の目安は，人間と動物の身体的な違いもさることながら，一番重要なのは，人間が最高の知能を備え，多彩で豊かな文化を築き上げられることにある。猿は動物界でもかなり高い知能を持ち，その姿も人間にそっくりだが，人と猿のこの二つの類似点は，「我こそは万物の霊長なり」という意識が強まる一方の人類にとって許し難いものだった。だからこそ現実の意識を表現することを第一義とする慣用語に，猿を風刺する言葉が大量に生まれたのだ。そしてさらにこうした慣用表現は，人類の美的感覚，文化現象，あるいは生活経験などを尺度に，猿の醜さ，うぬぼれといった面が前面に押し出された結果，猿と人とでは雲泥の差があることを際立たせるものになった。とはいえ結局のところ，これらの言葉が実際に用いられるのは，人類自身の欠陥を当てこすり，

けなす時，すなわち社会のスタンダードから逸脱した容姿や振る舞い，言動や品性などを猿の特徴に見立て，社会はその人のことを「アウトサイダー」扱いして蔑視しているのだと示す時だ。こうした類比を眺めてみると，慣用語が具現する猿への風刺的な見方がさらに浮き彫りになってくる。

4　民話の中の「猿」

『中国民間故事集成』[5] に収められている猿にまつわる民話29話のうち，代表的な4話を取り上げる。

(1) “猴屁股為什麼是紅的”（猿のお尻はなぜ赤い）

<北京巻　P.695 ～ 696より>

昔々，ある村に母娘二人だけの家があり，毎日母親は家の中で糸を紡ぎ，娘は家の外で臼をひいて暮らしていた。

ある日，臼をひく娘のもとへ大きな蜂が飛んできて，「ぶんぶんぶん，お嬢さん，これはかなうと思うかい」とやかましく騒ぎ，しつこく付きまとった。娘は取り合わずに放っておいたが，蜂は次の日もやって来て，うるさくてたまらない。娘が家に逃げ込んで母親にそのことを話すと，母親は言った。

「『かなう』と一言言ってやれば，どっかに飛んでいくだろうさ。」

そこで臼をひきに戻った娘が，「かなうわよ」と言ったところ，果たして蜂はどこかへ飛んでいった。

そんなことがあって何日か過ぎたころ，一人臼をひく娘のもとへ，今度は猿たちが列をなしてやって来た。行列に先導されしは花嫁の輿。猿たちは有無を言わさず娘を輿に押し込み，風のように去っていった。

待てど暮らせど娘が家に入ってこないので，母親は外に呼びに出て我が目を疑った。娘の姿がどこにもない。母親は胸が張り裂けんばかりに嘆き悲しんだ。

それから2年たったある日のこと，母親はようやく娘に何が起こったかを知った。山へ行った人が，ほら穴の前で娘が子猿をあやしているのを見掛けたと知らせてくれたのだ。それから母親は山のほら穴を探し当て，娘と再会を果たした。

娘が涙ながらにこれまでの話を母親に語り終えたところへ，大きな猿が飛び込んできて，人のにおいがすると騒いだ。しかし娘から「この子のおばあちゃんが来てくれたのよ」と聞かされ，急に神妙になって姑に挨拶した。

「あんた，目が真っ赤じゃないか，おやまあ気の毒に。そうだ，この薬で洗ってごらんよ。

すぐに良くなるから。」

母親はそう言いながら，小さな包みを取り出して続けた。

「ほら，あっちを向いて。これを煎じて，熱いうちに洗うの。目を開けちゃだめだよ。」

猿はその言葉通り，向こうへ顔を背けながら目を洗い始めた。

母娘はこの隙に，子猿と大猿を置き去りにして，一目散に逃げ出した。

やがてしびれを切らした猿が声を掛けた。

「もういいかい。」

ところが何の返事もない。そこで振り返って見ようとしてぎょっとした。上のまぶたと下のまぶたがくっついていて，目がこれっぽっちも開かない。そう，あの薬はのりだったのだ。どうにか指で目をこじ開けると，ほら穴にいるのは地面に転がって泣き叫ぶ我が子だけ。猿はすぐさま娘の後を追い，村の中にある大きな石の上に座り込んで夜通し娘を呼び続けた。そしてそれからというもの，猿は夜な夜なこの石の上で鳴き叫んだ。

それにたまりかねた村人たちは知恵を絞り，夕方のうちに例の石を焼いておいた。やがて夜になって，いつも通り姿を現した猿は石に腰を……。次の瞬間，「ぎゃっ」という悲鳴と共に猿は飛び上がり，ほうほうの体で逃げていった。毛がすっかり焼け，やけどで真っ赤になった尻をさらしながら。これに懲りたのか，猿はそれから二度と再び村に下りて来なかったという。

猿の尻が赤くなり，「お猿のお尻はまっかっか」といわれるようになったのはこの時からのことだ。

(2) “猴子和鱉打老庚”（猿とスッポン，義兄弟の契りを結ぶ）

<陝西巻　P.438より>

猿が川で水浴びをしていると，大きなスッポンが日向ぼっこをしに石の上へ上がってきた。どちらからともなく世間話が始まり，話しているうちに，互いの生年月日がまるっきり一緒であることが分かって意気投合。その場で義兄弟の契りを結び，毎日川辺で会うようになった。

それから何日か過ぎたころ，猿はスッポンを家に呼んだ。猿の家にはろくなごちそうがなく，桃だの落花生だのトウモロコシだのでもてなしたが，それでもスッポンは上機嫌で二日間泊まっていき，帰りしなに，「今度は俺の家に遊びに来てくれよ，これから帰って支度するから」と猿を誘った。「おまえの家は水の中じゃないか，行けるわけがない」と半ばあきれ顔の猿に，スッポンは，「俺が背中に乗せていくから。俺と一緒なら，水の中でも地上と同じなんだ」と請け合った。

数日後，川辺まで猿を迎えに行ったスッポンは，猿を背に乗せて水底の大きな洞窟へと

案内し，魚介類をふんだんに使ったごちそうで猿を歓待した。もちろん猿は大喜び。

食事の後，スッポンは藪から棒に，相談したいことがあると切り出した。

「兄弟，遠慮は無用だ。何でも言ってくれ。」

この言葉を聞いてスッポンは打ち明けた。

「ゆうべ竜王様から言付かったんだが，何でも竜王様は動悸が激しくなる病にかかっちまったそうで，その病には猿の心臓が効くんだそうだ。それでな，竜王様は俺とおまえが義兄弟なのをご存知で，おまえに心臓をもらってくれと，こうおっしゃる。なあ兄弟，俺の力になってくれるよな。」

スッポンの話を聞き，猿は急に背筋が寒くなったが，ふとある考えが浮かんだ。

「おいらたちは兄弟だからな，おまえが必要とあらば，おいらは嫌とは言えねえ。だがな，今朝土手でとんぼ返りの稽古をする時，大事な心臓が壊れちゃ大変だと，取り出して柳の枝に引っ掛けてきたまんまなんだ。」

スッポンの顔色がさっと変わった。

「もうすぐ竜王様のお使いが来るんだ，もし渡せなかったりしたら，おまえも逃げられないぞ。」

焦るスッポンを猿がなだめた。

「まあ兄弟，落ち着けよ，今から取りに行こう。すまねえが，おいらを川っぷちに連れていってくれ。」

是が非でも猿の心臓を手に入れねばと必死のスッポンは，猿を背に無我夢中で力一杯水をかき，川辺へとたどり着くや，猿はひらりと岸に上がり，するすると柳の木に登っていった。首を伸ばし，猿が心臓を持ってくるのを待っているおめでたいスッポンに，木の上から猿が吐き捨てるように言った。

「やい兄弟，とっとと帰りやがれ。おいらはここで桃でもかじることにするよ。義理のねえ野郎と付き合うのはご免だね。けっ，どこのどいつが心臓を枝に引っ掛けるっていうんだ。」

(3) “猴子断理”（お猿の裁き）

<四川巻　P.676 ～ 677より>

昔々，腹をすかせた狼が猟師の仕掛けた落とし穴にはまり，途方に暮れて悲鳴を上げているところへ，1匹の山羊が通り掛かった。

「山羊の兄貴，助けてくださいよ。」

待ってましたとばかりにと声を掛けてきた狼に，山羊が尋ねた。

「またどうしてこんなことに。」

そこで狼が，「飢え死に寸前だったんです。それでここにあった豚の腸に飛び付いたらこのざまでさ」と語ると，山羊はふむふむとうなずきながら言った。

「それはお気の毒様。だがね，昨日私のいとこが狼に食い殺されたんだ。だから助けてやるわけにはいかんよ。」

狼は立ち去ろうとする山羊を慌てて呼び止めた。

「おいらは善良な狼です，生まれてこの方，一度たりとも山羊を食べたことなんざございません。どこぞの狼が山羊を食べたから，狼はみんな悪いと決めつけるなんて，ひどいじゃないですか。」

なるほど，それも一理あると思った山羊は狼を助けることにし，つるを垂らして引っ張り上げてやった。

命拾いをした狼はやれやれと腰を伸ばし，こんなことを言い出した。

「兄貴は命の恩人ですよ。ところで一度助けたからには，最後まで面倒を見るのが筋ってもんでしょう。それでね，おいらは今腹ぺこで死にそうなんで，あんたを食わせてくれませんかね。」

「この恩知らず。命を救ってやった私を食おうなどと，そんな理屈が通るものか。」

途端に狼の形相が変わった。

「通ろうが通るまいが知ったこっちゃない。俺様はおまえが食いたいんだよ。この間抜け野郎，おまえのいとこを食ったのはこの俺様さ。」

山羊は歯ぎしりして悔しがり，このままでは死んでも死にきれないと，最後の賭けに出た。

「こうしよう，これから3匹の動物に，私とおまえ，どちらの言い分が正しいか判断してもらおうじゃないか。もし3匹が3匹とも，私が間違っていると言うなら，私は潔くおまえに食われよう。だがもし3匹が，間違っているのはおまえの方だと言ったら，私を食うのをあきらめろ。」

山の連中はどいつも俺様を恐れているから，俺様に不利なことを言うわけがない。そう踏んだ狼は二つ返事で応じた。

2匹は峠で鹿に行き会い，審判を頼んだ。そしてまず狼が羊を食べる理由を述べ，続いて山羊がやるせない思いを切々と語った。鹿は山羊の話に同情しつつも，舌なめずりする狼を見て，「私の手には負えないから，ほかを当たってくれ」と言い残して去っていった。

それから2匹はほら穴の前で蛇に行き会い，判断を仰いだ。狼と山羊の話を聞いた蛇は，狼が理不尽なのは百も承知だったが，狼にぎろりとにらまれ，「助けるなら，とことん助けてやりな」と言うほかなかった。

最後に2匹は桃の林で猿に行き会った。猿が公明正大なことを知っていた山羊は，すが

るように訴えた。

「猿さん，どうか公平なお裁きを。私は狼の命を助けてやったのに，狼は私を食べようとしています。恩を仇で返そうというのです。」

無論，狼も黙ってはいない。

「こいつは中途半端に俺様を助けて，じわじわと飢え死にさせようとしていやがるんだぜ。」

2匹の言い分を聞いた猿はしばし考えにふけり，それからおもむろに口を開いた。

「このいざこざのきっかけがよく分からないな。そうだ，これからその落とし穴の所に行って，そもそもどんなことが起こったのか，もう一度やって見せてくれないか。判断するのはそれからだ。」

こいつ，何を言い出すかと思ったら。まあいいさ，どう転んでも同じだ。何たって俺様には山羊を逃がしてやる気なんざさらさらねえんだから。そう考えた狼はやはり二つ返事で応じた。

3匹は落とし穴の所へ行き，猿は狼に穴に入るよう指図し，それをしかと見届けてから，山羊が垂らしたつるを断ち切った。そして，「おい腹黒狼，おまえみたいに性悪で懲りないやつは，猟師に食われてしまうがいい」と捨てぜりふを残して，山羊と共に意気揚々と立ち去っていった。

(4) “猴子和啄木鳥”（猿とキツツキ）

<四川巻　P.1371 ～ 1372より>

よく晴れたある日のこと，万山で日向ぼっこをしていた猿がふと目を上げると，樹上ではキツツキが餌を探していた。自分はキツツキより一枚も二枚も上手だと思っていた猿は，「やいキツツキ，俺と勝負だ」，とけんかを吹っ掛けた。キツツキは，「猿さん，私はこんなちびですから，到底太刀打ちできませんよ。あなたがちょいと石でも投げたら，私はいちころで死んでしまいます」と尻込みしたが，「やると言ったらやるんだ，勝負の日時を決めるぞ」と猿は聞く耳を持たない。そこでキツツキはしぶしぶ，「分かりました，ではいつにしましょう」と答え，猿は「11月の3日だ，もしその日が雨なら中止，晴れなら決行だ」と言い渡した。

さて11月3日，この日は土砂降りで，勝負はお流れになった。その次の日は雨がすっかり上がっていい天気。キツツキは万山に飛んでいって，猿のご意向を伺った。

「猿さん，今日やりますか。」

「おうおうおう，絶対おまえを負かしてやるぜ」と啖呵を切る猿に，キツツキが「どこでやりましょう」と尋ねた。すると猿は「この山の平らな所だ」と言うが早いか大きな金槌

を取り出し，「一撃で殺してやる」と息巻いて金槌を振り下ろしたが，キツツキがさっと飛び上がったので空振り。それからキツツキは猿の額に止まり，それ目掛けて猿は再び金槌を力一杯振るった。と同時に，キツツキはひらりと飛び去り，金槌は見事に猿の額を直撃。こうして猿は自分で自分の頭をかち割って，哀れ，あの世へ旅立っていったとさ。

中国の各地に残る猿にまつわる言い伝えのうち，一番有名なのは民話 (1) のような「猿の略奪婚」の話で，その結びは猿の尻が赤い訳を明かすか，そのほかの生理的特徴の説明をするかしておしまいというのがお決まりのパターンだ。そして実のところ，この手の言い伝えには，大昔の動物崇拝と後の世に生まれた「人間と動物は別」という意識が色濃く表れている。動物崇拝は人類史の初期に広く行われていた重要な文化現象で，いわば揺籃期にあった人類は「万物に魂が宿る」という自然観に基づき，自分たちの身近にいた動物たちを，その特殊能力ゆえに崇拝するようになった。分けても猿は人類よりも先に出現していたから，人類は誕生当初から猿と頻繁に接触し，彼らの器用さと利口さ，自分たちとよく似た姿，また旺盛な生殖力に特別な関心を寄せたに違いなく，それがやがては猿信仰へと発展したと思われる。ところが長い年月を経て，人類は依然として動物たちと深くかかわり合いながらも，社会道徳，礼儀，尊厳，人間性という面から，自分たちと彼らの間に明確な一線を引き出した。こうした流れの中で生まれたのが猿と人との異類婚姻譚であり，「猿はしょせん猿」という結末だ。だから「猿の略奪婚」の話は，太古の文化の痕跡と，その後に生じたさまざまな意識の交錯の名残をとどめた化石のようなものといえるだろう。民話 (2) のような，猿とほかの動物たちとのやり取りを主とした話も珍しくなく，水中に住む動物が仕掛けた罠にはまった猿が，よく回る頭を武器に鮮やかにピンチを切り抜けるという筋書きが最もよく知られている。こうした話が広まったのは猿が愛され，大切にされていたからこそのことで，人々が，ピンチに立たされる主人公の猿に感情移入してはらはらするのは，同じ陸に住む動物として心のどこかで似たような苦境を連想して恐怖心を抱き，猿の運命はどうなるのかとついつい引き込まれてしまうからに違いない。ここに描かれている猿のキャラクター，すなわち，どんな時でも冷静沈着かつ臨機応変，機転一つで危機を乗り切り，あこぎな水生動物をからかう知恵と勇気の持ち主，というそれは，人間の好意と同情によって与えられた役柄で，おかげで猿は愛すべきヒーローにまで仕立て上げられ，そのイメージアップに一役も二役も買っている。民話 (3) は猿が一計を案じて弱きを助け，獰猛で狡猾な動物をやっつける話で，この猿のイメージは知恵が働く策士，強きを恐れぬ正義の味方で，さっそうとしていて好ましい。これとは裏腹に民話 (4) のような，猿を皮肉ったものも多少あり，その筋は，利口ぶった猿がほかの動物たちに自分の賢さをひけらかして，結局ばかを見る，というのが定番になっている。このたぐいの話は，

猿を風刺してあざ笑うことで実は人類の尊厳と優越感をより高めている，といっても過言ではなく，先に紹介した“朝三暮四”の寓話が，戦国という極めて古い時代に生まれたのは正にこのためだ（P.71参照）。この四つの民話から分かる通り，猿にまつわる言い伝えには，彼らに対する人間のスタンスがいろいろな面，いろいろな角度から映し出されているだけに，そこに描き込まれた猿のイメージも当然のごとく複雑で多彩な特徴を帯びている。

5 「猿」と十二支

十二支獣の起源については俗説があるばかりでなく，歴史的に見ても，多数とはいえないながら，複数の文人や学者たちがそれぞれの切り口でこの謎に挑んできた。そのうちの申［猿］に関する部分だけを取り上げるなら，本書で既に何度か触れている，十二支は12の動物の習性と活動時間に基づいて決められたとする説は，太陽が西に傾いて涼しいころに当たる申の刻に，猿がきゃっきゃと鳴いてはしゃぐため，猿と申が組み合わされたとしている。別の説によれば，十二支獣選考の条件は身体的欠陥があることで，猿に欠けているのは尻だという。また，12の動物の爪の数とその習性は，陰陽の気及び十二時に対応していると考察し，これこそが十二支獣の順番の根拠だとする説もある。この説いわく，十二支獣の順番は，まず鼠の項で紹介した説と同じ要領で，動物たちを足の爪の数の奇偶によって陽と陰と分け，その上で12の刻，つまり一昼夜のうちに起こる陰の気と陽の気の交替や上昇と下降，その強弱，及び12の動物の習性に応じて，それぞれの刻に各動物を割り当てるという手順で決められた。猿が申に当てられたのは，爪の数でいえば猿は陽，そして易学では申は三陰であり，陰が盛んなことは“黠”（狡猾）に通ずるとされているため，ずる賢い猿が選ばれたのだそうだ。このほかある学者は，十二支の形成には太古の昔に始まった動物崇拝と古代の天文学の影響が直結しているという観点から，猿が干支に組み入れられたのも，古くからあった猿信仰や古代の天文学の影響と関係があり，猿はその身軽さと利口さゆえに，古代人たちからあがめられて十二支獣の一員になった，と見ている。では次に，干支占い[6]に移ることにしよう。

> 申年生まれの人の性格は抜群に素晴らしい。ただし干支の猿には人間並みの知性とうそをつく能力がある。なぜなら申は十二支の中でも一番人に近い動物である類人猿を指すからだ。中国の歴史書では，猿は発明家，即興詩人，そして人の資質を引き出す良き指導者のシンボルとされているが，同時にその一流のずるさと魅力で人をだますペテン師の代名詞でもある。申年の人は才気煥発で，分析力に優れ，複雑に入り組んだ問題を処理して解決するのはお手の物だ。また進取の気性と虚栄心，向学心があるから，社会の豊富な知識を身に付けることができ，どの職業を選んで

も仕事に全身全霊を傾けて見事成功を収め，手ごわいライバルに出会うことは一生ないだろう。だが申年生まれにもマイナス面はある。優越感が強い申年は人をないがしろにする上，常に打算的で自分の損得のことしか眼中になく，自分勝手で見栄っ張り。しかも嫉妬心の塊で競争意識が強く，汚い作戦を立てるのは得意ときているので，緻密かつ周到に事を運ぶ。とはいえ，やはり申年は断トツの干支で，生まれつきオールマイティーだから，作家，外交家，スポーツ選手，株式ブローカー，教師として優れた才能を発揮すること請け合いだ。さらにビジネスや財テクの才にも恵まれているが何分締まり屋なので，取り引きではとにかく些細なことにこだわり，すぐ値引き交渉をする。申年の人は頭の切れるやり手で，何事も抜かりなく行おうという心理とその生まれ持った素質のコントラストは見事といえるほど。自分を磨くために何でもトライしてみようとする申年は，綿密に計画を立てるタイプだから，仕事中に1分たりとも時間をロスすることはない。

この性格判断から見受けられる申年生まれの性格は,「頭が切れて腕が立つ」,「聡明」,「進取の気性に富む」,「努力家」,「向学心がある」,「多芸多才」,「カリスマがある」,「時間を大切にする」,「注意深い」と頼もしい限りだが,「人をだます」,「悪賢い」,「見栄を張る」,「人を軽んじる」,「利己主義」,「嫉妬深い」,「けち」,「つまらないことを気にする」と粗も多く,「競争意識が強い」ところはベクトルによっては長所にも短所にもなり得る。

この通り，申年生まれの人に下された評価は短所もあれば長所もあって，決して一面的ではなく,「言葉」や「民話」の猿のそれより断然高い。このイメージアップの原因は，性格判断の文でも触れられている「猿と人間の近さ」にある。人間に似ている猿を全面否定すれば，人間自身を全面否定することになりかねず，人々としてはそれは何としても避けたい。そのため猿と人間を結び付けて考えざるを得ない時だけは，見方がぐっと理性的になるのだ。要するに，この評価の違いは人々の苦肉の策というべきもので，猿に対する人々の矛盾した心理がここにもにじみ出ている。

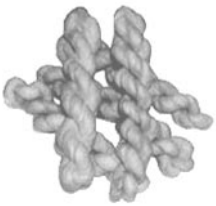
6　イメージの中の「猿」

これまで述べてきたことから明らかなように，中国人にとって猿は複雑で多面的なイメージを持つ動物で，それは時と場合，見る人によって異なる意味を帯びてくる。猿は一方では元気で愛くるしい利口者，人類の祖先にして万物創造の英雄，動物でありながら嬉々として「人間」を助ける知恵者，向かう所敵なしの勧善懲悪と妖怪退治のヒーロー，人間の営みを支える良き片腕だ。だが他方では淫らでたちが悪く，妖怪と化してたたりをなし，策士策に溺れるの典型で小賢しいまねをしては墓穴を掘り，気まぐれでやかましく，

落ち着きがなくてじっとしていられず，何をやらせても長続きしない上，その姿は醜く滑稽で……と，その多々ある欠点ゆえに，しばしばからかいとあざけりの対象とされ，果ては哀れなピエロにまで貶められる。こうした認識が形成されるまでには恐らくさまざまな要因があったのだろう。しかし何といっても大きいのは，人々が長い時間をかけて猿の習性の多面性を理解し，それを踏まえて猿に象徴的な意味を与えていったことだ。猿のイメージは，たぶん次のような段階的な変化を経て今日の形になったと思われる。人類が誕生して日が浅いころ，人間はまだ動物とさしたる違いはなく，それどころかある面で引けを取っていた。そこで人々は自分たちより優れた能力を持つ動物たちに尊敬と崇拝の念を寄せ，それは猿にも向けられ，やがて神話時代の崇高，偉大，公明正大な猿の輝かしいイメージを生む。ところが人類社会の発展につれて，人々の中で万物の霊長たる意識が徐々に確立し，人間と動物を区別しようとする傾向がどんどん強まった結果，猿のイメージは「異類」としての色彩が次第に濃くなり，ついには人類とはまったく違うものと完全に線引きされた。これ以降，猿の地位は一気に下がり，人間からとやかくいわれ，好き勝手にけなされたりほめられたりする今日の境遇にまで落ちぶれてしまったのだ。

注

1）劉咸（1954）『猴與猿』P. 8 ～ 13　中国科学図書儀器公司出版
2）現代の中国では「サル」というと一般的に“猴”の字を使う。ここでは混乱を避けるため，一部の箇所では漢字を使わずに「サル」と表記した。
3）ある書物に関する注釈を集めたもの。
4）“麻花”



5）鄭高咏「犬のイメージに関する一考察」『言語と文化』第10号　愛知大学紀要　P. 185 ～ 186参照
6）同上　P. 192参照

主要参考文献

（1） 郝懿行 『爾雅義疏』 北京市中国書店影印本
（2） 邱崇西（1983）『俗語五千条』 陝西人民出版社
（3） 北京大学中文系（1987）『歇後語大全』
（4） 鄭宣沐（1988）『古今成語詞典』 中華書局
（5） 劉潔修（1989）『漢語成語考釈詞典』 商務印書館
（6） 張清常（1990）『胡同及其他』 北京語言学院出版社
（7） 武占坤・馬国凡（1991）『漢語熟語大辞典』 河北教育出版社
（8） 呉裕成（1993）『人與十二属相』 天津大学出版社
（9） 馬如森（1993）『殷墟甲骨文引論』 東北師範大学出版社
(10) 袁珂（1993）『中国神話通論』 巴蜀書店
(11) 王紅旗（1997）『神妙的生肖文化與遊戯』 山東友誼出版社
(12) 張晧（1997）『十二生肖』 湖北教育出版社
(13) 史有為（1997）『成語用法大辞典』 大連出版社
(14) 『漢語大詞典』（1990～1993） 漢語大詞典出版社
(15) 『語海』編輯委員会（1999）『語海』 上海文芸出版社
(16) 『古代漢語詞典』（1999） 商務印書館